
パトナ計画

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パトナ計画

【Nコード】

N3571D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

パトナとは、働く親を労わるために産まれたての子供を補佐することが出来る、神が創った小型人間。産まれたその瞬間から一緒。そしてそれは成長する子供が15才の誕生日まで人間界で生活するお世話係。体は小さいが、心はパートナーである子供を見守る大切な存在。しかし、異端児で親から見離された事で心に傷を受けている暁の下に産まれたパトナは色々と苦勞が耐えない。そんなちよつと変わった暁と、それに係わるクラスメイトの茜。そしてパトナとの無骨な友情と信頼のお話

#1 パトナのいる世界

子供の心を満たすのは大人なのであるのか？それとも環境なのであるのか？その答えは当の子供にしか出せないけれど、世の大人たちの心の支えは子供であろう。

しかし、世界は共働きをする家族で構成し始めた。そこで、神は一つの試みを開始した。

『パトナ計画』である。産まれて来る子供の産声からパトナを同時に産ませて、その子のおもい役を命じた。その期限は、子供が十五歳になる誕生日まで。そして月日は流れ、パトナは一般的に受け入れられるようになった。

いつもの朝がやってきた。けたたましく鳴り響く目覚まし時計にうんざりする。耳ははつきりその音を聞き分けていたが、何故か目の前は真っ暗闇だった。しかも目元が重い。

「パトナ……寝相悪いのは分かっているけど、もう少しどうにか出来ない？」

その相手は、とんがり帽子に短い金髪がちょこんとはみ出している。

「暁、おはよう……」

まだ夢から醒め切らないのか、暁の顔の上から腕をのけようとしていない。ただムニャムニャと独り言を口走っている。

パトナは基本的に、女の子には女の子のパトナ。男の子には男の子のパトナが産まれてくるものだが、何故か、女の子の暁の元には男の子のパトナが産まれた。そのせいで、暁は異端児扱いを被る羽目にあつた。そして、輪を掛けるように不運だったのは、日本人なのに銀色の髪。白人のように白い肌。瞳はライトグリーン。まるでハーフなのではなからうかとさえ思われる容貌。もちろん、家系に外国人などいるはずが無い。だから、家庭不和な環境で、産まれて

まもなく人里離れた山奥の祖母の家に引き取られ、隔離して育った。その為に、人との間にかなりの隔たりが出来た。

そんな暁の心の支えはパトナだけであつた。基本的に、無関心、無頓着。が服を着て歩いているような暁ではあるが、心を開けるのはパトナしかいなかった。それだけ暁には無くてはならない存在であつた。

パトナは背丈30cmくらいしかない小型人間である。コンパクトな作りなので、鞆に押し込んで学校に行く。それが世の常だつた。もちろん、パトナも学校に設置されているパトナ学校に通っている。そこでパトナの勉強会が開かれるのだ。

今日も、暁は授業を受けに行く。歩いて一時間弱のところに学校があるので、急いで支度した。

暁の背丈は170cm有り、一般の中学生にしてみれば、かなり大柄で目立つ。その上この容貌だと、この山奥の狭い界限で知らない者はいないと言っても過言ではない。変な意味あい有名人であつた。しかも、頭脳明晰、スポーツ万能とくれば誰もが意識しない訳にはいかない。

それだけの事なのに、と、本人は冷静に判断しているが他人は一目置く。それが嫌でたまらないから、未だ女だてら一匹狼として過ごし友人の一人も作つた試しが無かつた。しかし、こんなことがいつまでも続けられるはずも無い。だから、パトナは暁に再三友人を作れと指示を仰いだきたのである。

あと一週間もすれば、暁の十五歳の誕生日が来る。そうになると、パトナはパトナの世界に戻らなければならない。今後誰が暁のことを思つて相談に乗るだろうか？それが心配でたまらなかつたのだ。

暁にとって学校は勉強するところ。そう割り切っている。休憩時間周りで騒いでいる学生を遠巻きに見ていると、不思議にイラつく。本当は仲間に入りたいのかもしれないが、自分から入って行こうな

んて出来はしない。どうせ面白がられるだけだ。ただそう判断する。だから、次の時間の予習をすることになっている。

しかし、そんな暁を気にしていた人物がこの教室の中にいた。名前は橘茜。栗色のショートカットの髪に小麦色の肌。大きな丸い目をした活発な少女である。

実は、この茜。自らのパトナであるキララを通じて事の次第を知っていた。それだけに、放っておけないと自らのおせっかい焼きの性格が災いしているのである。もともと、目立ちたがりの性格をしてはいるが、筋は通して友人と付き合っていた。運動大好きで勉強嫌い。明るくて陽気な性格をしている。その為友人は多い。気兼ねなく付き合えるとみんなそう思っているらしい。だけど友情ってそんなものであるのか？茜は近頃全く性格の異なった暁に惹かれ始めていた。

#1 パトナのいる世界（後書き）

こうだったら。みたいなお話です。

もし神様がいたのであつたら、少しだけ変わった世界を構築してくれないかな・・・なんて思ったり。

子供が出来たら、是非こういうパトナがいたら、安らげるのかも？

#2 友達の定義

「名無しのパトナ！おはよー」

パトナにも名前がある。大体無い方がおかしい。産まれた時に付けてもらったのが一般的であつたが、茜のパトナはそういう訳には行かなかった。男の子だと分かった時点で異端児扱いを被ったからである。だからそのまま付けてもらえず、パトナなのである。でも、パトナは気にしてなかった。暁という同士がいるし、キララがいるからである。

「おはよう、パトナ君！」

隣の席に座るためにキララははやし立てる他のパトナ達押しのけて割り込んできた。

「後、一週間後だね……暁ちゃんやはり聞き入れてくれない？」

全てのパトナの悩みをキララは知っているので毎日問いかけた。

「うん。どうしようもない頑固者だから割り切ることが出来ないみたいだよ……あと一週間しかないのにこの調子で丈夫かなあ」

「実はね、茜にそのことで相談したら動いてみるって行ってくれたんだよ。本当は気にしているみたい……小学生の時、一度声を掛けたことがあるらしいんだけど、拒絶されたらしいんだ。だからまた拒絶されるんじゃないかって自信ないみたいだけど……」

「それ、本当？」

「うん。本当！だからもう少し頑張ってみたら？」

「ありがとう！キララちゃん！恩に着るよ！」

そんな話をしていると、一時間目のチャイムは鳴った。

「茜！何してるの？次体育だよ！」

クラスの友人が隣の教室に移動しようとして声を掛けてくる。しかし、茜はまだ席についていた。

「先行ってて！後から行くから！」

暁を除いた他のクラスメイトはいなくなった。取り敢えず、二人きりになれた。これからこっぴどく一言を言わないといけないといけないのかと思うと赤面しそうになった。

でも、言わなきゃ！そう決心すると、勢いに任せてスタスタと暁の座っている席へと急いだ。

「？」

突然、目の前に立ちはだかる小柄な茜に気づき、暁は面を上げた。

「えと、……私と友達になってください！」

胸がドキドキしている。友達になろうと宣言してなれるものじゃ無いかも知れないが、簡潔で分かりやすい言葉ではあった。

「……」

暁自身、何を言われたのか上手く把握できなかった。友達って言葉は胸に響いたが、それにどう反応すれば良いのか困っていた。沈黙は続く……

「あ、ごめん！いきなりこんな事言われても困るよね？……」

柄に無く茜は照れていた。でもその返事は返っては来なかった。考えているのかどうなのか判らないけど。

そんな中やつと理解した暁は戸惑っていた。でもそれを押し隠そうと、

「次、体育だつけ？」

とだけ言って、荷物を抱えて体育館に行く準備をし始める。その様子を見ていた茜は、以前のように無視されなくて良かったとホッと肩をなでおろし、

「一緒に行こうよ！」

自らの荷物を抱えて、暁の後を追いつけたのである。

「で、収穫はあったの？」

キララは家に着いて、ワクワクしながら鞆から顔を出し、茜に問いかけた。

「まともな話はしなかったけど、前みたいに無視はされなかったよ。」

少し穏やかになった感じ」

「そっか、良かったね！」

「でも、自分から話しかけてくることは無いんだよね。頑なに拒絶しているのかもしれない……私ってやっぱりウザいかな？」

イマイチ反応が希薄だから心配になるのも当然であった。

「そんなこと無いよ！茜はちょっとおせっかいなところ有るけどそれが取得じゃん！パトナ君とキララはちゃんと応援しているよ！」

茜のことはよく分かっているとだめる。

「そうだよな？私らしく接してみるよ！」

突然元気になる茜を素直にキララは喜んだ。

「気長にやってみるよ。うん！」

一週間なんて直ぐに過ぎてしまう。でも出来る限りのことはやっておきたいと思う茜は、諦めが悪い性質だった。

給食のときも、休憩時間も離れずまとわりつく。そうすることで自分をアピールするのは十分だ。クラスメイトはそんな茜を不思議と遠巻きに見ていた。

「最近門倉さんに夢中だね？」

帰り際に一人のクラスメイトが茜にばやいた。話をするのがほとんど無くても、一緒にいるだけなら事情が違つとそう察した。

「何なら、一緒に門倉さんと給食食べる？」

余りにも楽しそうに話す茜に、呆れた風に、

「楽しそうじゃ無いから遠慮しとく。またなんでそんなに気にしてるのか知らないけど、あの人、迷惑してるんじゃないの？表情さえ変えずにさ！」

少し、嫉妬されてるのかとも思ったが、

「楽しいよ？特別扱いしなければその内、心開いてくれるような気がするもん！」

その言葉にイラついたのか？

「勝手にやっててよ！」

気分を害したクラスメイトは、そのまま放課後の教室を立ち去った。

#3 心の傷

次の日も、同様に暁に声を掛けた。しかし、昨日までと違った暁の態度に気がついた。完璧に無視されたのである。

「どうしたの？私、門倉さんに何か悪いことした？」

それに対し、暁は無言で机の上の落書きを指し示した。油性マジックで書かれた悪戯書きのそれを目にし、茜はすぐに事を察知した。「誰よ！こんな事したの！」

思わず声を張り上げずに入られなかった。周りのクラスメイトはクスクス笑っている。それを合図に、暁は、

『そう言う事だから、私に近づかないで』と言いたげな表情をし、静かに教科書を読み始める。

折角良い感じになってきた所なのに、とんだ邪魔が入ってしまった。茜はとにかく作戦を練り直そうと授業もそっちのけで一日中考えていた。しかし、何も良い手が思い浮かばず途方に暮れて自宅に足を運んだのである。

当の暁は、こう言った事件があったことをパトナに話して聞かせた。ここの所、暁の様子が明るくなってきたのに気が付いていたパトナにとって、その事件は歯がゆい物に感じられ、一時怒りもしたが、

「暁くでも、投げやりになっちゃだめだよ？キララちゃんが言うには茜ちゃんは本当に友達になりたいと思うっているんだから！」

だけど、暁のショックはかなりな物らしく、静かに怒っていた。最後には、

「本当にそう思ってるんだったら、あんな事する友人を持つ橘さんがどうにかすべきだわ！」

と、他人に罪を擦り付ける。でも、パトナは本当は暁が悪いと思うっていた。今まで、誰ともコミュニケーションをとろうとして

こなかった本人がこんなことを言つて良い訳が無いとそう思ったからである。だから、

「じゃあ、勝手に拘ねていれば良いんだ！ 曉なんか知らない！」

一言引導を渡して家を飛び出たのである。

一人で考える時間を与えるために家を出たパトナは、一生懸命小さな歩幅でテケテケと走つてキララの住んでいる茜の家に向かった。茜の家は小高い丘の麓にある一軒家である。

そこまで全速力で駆け抜けた。三時間もかけて着いた時には全身汗でびっしょりであった。

「どうしたの？ パトナ君！」

その疲労した姿に、玄関口のキララは上がるようにと促した。茜もその様子に気が付き、

「ゆっくりして行つて良いのよ？」

今日のこともあるので、何か門倉さんの家であつたことは明白であつた。

「水飴食べる？」

部屋に入るなり、パトナはキララに持ちかけた。水飴はパトナにとつての御酒のようなものである。

「うん！ 食べる！」

こうなつたら、自棄酒だといわんばかりの勢いでパトナはキララに言い放つ。もう、愚痴をぶちまけたい気分であつた。

「大体、曉はね〜ヒック、自分勝手なんだよ〜ヒック僕のことなんて考えてないんだもん！ ヒック。後、四日しかないんだよ？ 分かつてんのかよ〜くそ〜ヒック！」

いい加減に話疲れた時には、眠気が押し寄せてきた。そんなパトナをキララは暖かく見守っていた。そして、茜もそろそろ寝るよ？ とパトナを寝かしつけようと思い、キララと一緒に見守った。

その夜から暫くの間パトナは茜宅で厄介になることになつたのである。

#4 変化の兆し

そんな頃、ふて寝していた暁は一向に返ってこないパトナに気が付き狭いはずの一室に一人残されて考えていた。狭いはずの部屋が、なんだか広く感じられた。自分は一人なんだと改めて実感した。

もう直ぐパトナはいなくなる。それがこの状態なんだと知らしめられると、今までの自分の他人に対する姿勢が情けなく感じられた。「何処行っただろう……」

不安が押し寄せてくる。もう、帰って来ないまま、パトナはパトナの世界に帰ってしまうのだろうか？自分勝手なことばかりで、無関心な暁でもそれが気になり始めていた。

「パトナ……」

暁はいつまでも眠らずにパトナの帰りを待っていたのである。

それからの三日間は最悪であった。徹夜明けの暁の瞳は真っ赤なウサギの目になっていた。でも、眠い目を擦りながらも、今日こそ学校に行けばパトナに会えるのではないだろうか？と期待をしていた。

しかし、パトナ学校の教室を覗いてみても通って来ている様子は無い。パトナの姿が見受けられなかった。一段と気分が落ち込んでしまう。でも、確かキララと言うパトナの友人がもしかしたら事情を知っているかもしれないと思い、呼んでもらうことにした。が、その時授業が始まるチャイムが鳴り響いたので、仕方なく暁は自らの教室に足を運んだのである。

「あの……」

暁から声を掛けるのは初めての事であった。暁は、キララが茜のパトナだと知っていたため自らの教室で茜に問いかけようと一大決心をしたのである。こんな風に暁から話しかけられるとは思ってな

かった茜は、大きな目を瞬かせて机の前に立つ暁を仰ぎ見た。

「何々？何でも言ってくれて良いよ！」

茜は、こう言ったチャンスが巡ってくるとは思ってなかった為弾んだ声で問いかける。

「あのね。私のパトナ……橘さんのところに言っただけだと思って……」

少しそわそわしていたので直ぐ返答した。

「うん。うちに来てるよ。え？もしかして、門倉さんに何も言わずに出て来てたの！？」

パトナからは何も訊いてなくて、まさか、こんな状況になっているとは知らなかった。てっきり了解済みだと思っていたのである。確かにパトナは荒れていた。愚痴はこぼすし、酔っ払いまくるし……態度は凄かったけど、行き先くらい告げるのはパトナ界の常識である。

「そうなんだ……あの、明日、私の誕生日なんだ……パトナに会いたくて……」

素直にそう言ってくれると、茜は接しやすかった。

「良いよ。授業終わったら私の家においでよ！パトナ君に会いにおいでよ！」

「迷惑じゃ無い？」

「迷惑だなんて、そんなこと無いよ！ちゃんと私の家にいるし、パトナ君も会いたいと思うているはずだから！」

「……」

「大丈夫！保障する！」

「……」

静かに頭を縦に振ると、暁は何事も無かったように自らの席に着いたのである。

放課後、茜は暁を連れ添って学校を後にした。勿論、キララも茜

の鞆の中に同乗している。そうして、三人は茜の家に急いだ。

しかし、道程半分くらい差し掛かった時、茜は机の中に明日提出しなければならぬ大事な宿題のプリントを忘れて来てしまったことに気が付いた。そこで、キララを道案内役に当てがい、自らは学校に戻ることを言い残して先に向かうように言い残した。また同じ道を辿るのは申し訳ないと思ったからである。

「キララ、門倉さんをよろしく頼むね！」

今にも雨が降り出しそうな空を見上げてから茜は言い含めた。それに快く応じるキララ。

茜の言う事は今まで何でも聞いてきた素直なキララだから任せられるとそう思っていた。

しかし、この行為が後々大変なことになったのである。

#5 思わぬ事件

茜は、プリントを取りに戻り、大雨の中一時間かけて自宅に戻る。そして自らの部屋に駆け込んだ。ただ、いるはずだと思い込んでいた暁とキララはそこには居なくて、パトナが座布団の上で本を読んでいた。

「あれ？門倉さんとキララは？」

その言葉に、

「え？帰ってきてないよ？暁も一緒なの！？」

一瞬、パツと表情が明るくなったパトナであつたが、慌て始める茜に気が付き、小首を傾げた。

「そんな……戻ってないってどう言う事？」

どう考えたつて変だ。追い抜くなんて考えられない。外は大雨。ここまでの道のりには一つ小高い丘を越えなければならない。もしかして迷子になっているのか？それとも……事故？

不安な気持ちパニックを引き起こし始める。キララが居るからと安心していたのに、この有様では気が気で入られない。

「どうしたの？茜ちゃん……もしかして暁とキララちゃんの身に何かが有つたの！？」

パトナは何かとてつもなく不安にかられ、茜に問いかけた。その言葉に、

「パトナ君！これから門倉さんとキララを捜しに行くから、ここで待ってて！」

「捜しに行くって！？じゃあ、僕も行く！」

茜は、パトナの要望を聞き入れ、茜は大雨の中傘を差し自宅から飛び出たのである。

その頃、暁とキララは森の中の小さな崖の下にいた。泥濘に足を取られた暁は、バランスを崩しキララと共に転がり落ちたのである。

そして、暫くの間もとの道に這い上がろうとしたのだが、自らの身長より高い崖と、雨で濡れた土で上手に登ることが出来なくて途方に暮れていたのである。しかも、このところの徹夜が災いし、身体が熱っぽい。やがて眠気が襲い始めた。

「ダメだよ、暁ちゃん！起きて！」

キララはその様子を見て必死で起こそうとした。もちろん、キララの背丈ではどうすることも出来ず、とにかく大きな声で助けを求めることもしてきた。が、普段ここを通る人など稀で助けは来ないでも、頑張って大きな声で助け手を求めた。もう、声はガラガラである。

「パトナ……」

横でうわごとのように暁が呟いている。キララは泣き出しそうになっていた。何でもっと注意してあげられなかったんだろうと思っても、後の祭りだ。キララはもう声が出なくなっていた。そして容赦なく降る雨は酷くなる一方であった。

茜はパトナを肩の上に乗せ懸命になって暁とキララを捜した。ここまで道は一本しかない。だからとにかく学校までの道のりを引き返していた。

「雨、酷くなってきたね……シッカリ掴まっているのよ。パトナ君！何か気がついていたら教えてね！」

茜は必死になって辺りに目を配った。しかし、今のところ何の手がかりも掴めない。根気強く注意深く。足元の泥濘を気にしながら歩いた。三十分は掛かっているだろう。もう半分近く歩いている。そして、やっと手がかりが見つかったのである。

泥濘にずり落ちたかのような足跡。それを確認すると、まっすぐその下を見下ろした。

すると、崖下に横たわっている人影が見えたのである。

「キララ！門倉さん！」

必死で呼びかけた。すると、微かではあるが、か細い枯れかかっ

た声が聞こえてくる。

「キララ!？」

それはまさしくキララのものであった。しかし、こんな崖からどうやって二人を救出すべきであろうか？茜は考えていた。そんな時パトナが、

「縄！何処かにないかな!？」

人里はなれたこんなところにそんな物はあるはずがない。と、思つて一度家に帰ろうと思つていた矢先、近くに掘つ立て小屋が有つたことを思い出した。もしかしたら何かあるかもしれない？と思うとすぐさまその小屋へと足を向ける。すると都合よく自らをも支えることが出来るような太い縄があつた。無断で借りますが、すみません……茜はそれを借りて元の場所に戻つた。

戻ると、傘を置き身近にある太い木に縄を結びつけ、自らの腰にもそれを巻きつけゆつくりと降りていく。そして、身体の大きい暁を抱きかかえると必死で縄を手繰り寄せながら登つていった。

もう、体中の力を使い果たし感じである。身体の節々が痛くてしょうがない。でも、運よく通りかかつてくれたこの道を通る近所の大人に出逢い、茜たちは助けてもらつて、家までたどり着いた。

#6 再会

暁の目が醒めたのは、夜だった。まだ火照ってる体がだるい。見慣れない天井が目に入ってやっと口を開くことが出来た。

「ここは？」

「暁気が付いたの!？」

パトナの心配そうな顔が暁を見下ろしていた。

「パトナ……」

ジンワリと心が温かくなる。今にも涙が零れ落ちそうだった。

「解熱剤飲んでるから、もう少し安静にしておいた方が良くないよ？」

丁度、頭を冷やす為の氷水を持ってきた茜がホッとした表情で暁を覗き込んだ。

「橘さん……ごめんなさい。迷惑掛けちゃって……」

「大丈夫だよ？迷惑なんて掛けてない。第一私がプリント忘れてしまったのが原因何打もん。誤るのはこっちだよ。それに、もっと早くにパトナ君のこと話してれば良かったね。ごめんね……」

「茜ちゃんが悪いんじゃないよ。僕がちゃんと暁に言っただけだから……」

パトナは自分を恥じた。感情に赴くまま、自らの使命を放棄したんだと後悔する。

「誰も悪くない！私が悪いんだ。パトナも、橘さんも……謝るのは私だけで良い！」

少しずつ何かが変わろうとしている。パトナはそう感じた。暁の中で何かが芽生え始めようとしている。そう感じ取った。

「今日は泊まっていきなよ。その身体じゃ、家に帰るのも大変でしょ？お祖母さんには私から連絡入れておくから」

言うや否や、連絡簿を机の引き出しから取り出すと階段を駆け下りて行った。

「暁ちゃん、覚えてる？茜はね、小学校時代に一度声を掛けただ

つて。でも、拒絶されたから、諦めたんだって。でも、凄く勇気が居ることだって思うよ？おせっかい焼きだけど、茜は良い子だから友達になってやってください！」

パトナの横に座っている、キララは真剣に頼み込んだ。その様子に思わず自らを恥じた。

「……友達になりたくないわけじゃないんだよ。ただ、私じゃ迷惑を掛けるから……こんな後ろ向きな態度しか取れないし……」

「じゃあ、変えればいいんだよ。人間変わることが出来ないなんてことは無いよ？暁は不器用なだけ！せっかく差し伸べられた手を振り払う必要性って何処にある？」

パトナは、これが最後の忠告になるかも知れないと思っているのかもしれない。力強く暁に言葉を発した。その気持ちを汲んだのか？

「変わるかな？」

「変わるよ！」

「ありがとう、パトナ、キララちゃん……」

そんな話を終えた頃、茜が戻ってきた。

「何々？何の話？」

穏やかな空気が流れていることに気が付き、茜は微笑んで問いかけた。

「ひ・み・つ」

パトナとキララはくすくす笑って場を盛り上げた。それを、何なのよと詰め寄るが、話題はそれだ。でも、何だかいい方向に話が流れているようで、茜もその話にはもう触れようとはしなかったのである。

#7 さようなら

次の日は暁の誕生日。パトナはもうこの世界から姿を消す。それを考えて、暁は一日学校を休んだ。この日だけは、学校を休学することが出来る決まりである。体調は一休みして回復し、動くことが出来た。

最後の一日。パトナはいろんな話をした。別れを惜しむかのように。その事に気を使ったのか、茜とキララは早朝から学校に出かけた。水入らずにはお邪魔かなと思ったらしい。

でも、そのおかげで、気兼ねなくなんでも話すことが出来た。

何故神は、私をこの世に産み落としたのか？パトナを遣したのか？それを考える。もしかしたら、常識を乗り越えた中で、真実の生き方を要求したのかもしれない。そう思い始めた。暁なら、これを乗り切ることが出来るかもしれないと言う試練。ならば、とことんその要望に応えてやろうかと思って思った。

パトナはそんな暁の思ったことを言葉として受け取り前向きな暁を感じ取った。もう、自分の役目は終わったのだとそう感じ安心した。

時間は早く過ぎ去っていく。そして、別れの時がやってきた。ポウツと七色に輝くシャボン玉にパトナは包まれ、浮き上がる。それは、茜の部屋の窓からゆっくりと飛び立ち始める。

暁はその後を追いかけた。いつまでも快晴の空を仰ぎ見る。手を振り続ける。そして、完全に消え去ったシャボン玉は、一粒の雫となつて暁の掌に残ったのである。

「ただいま」

夕方、茜とキララが帰ってきた。

「パトナ君はもう行っちゃったんだ……」

茜は落ち込んでいるであろう暁にやさしく問いかけた。泣き出す

んじゃないかって気を配ったつもりだった。しかし、暁は微かに微笑んでいた。茜は、まるで別人であるかのように見えた。

「心配する必要性はないようだね？」

茜はホツと息を吐く。自らの誕生日に、キララが居なくなる時、自分はこんなに冷静で居られるであろうか？ふと、脳裏にそれがよぎる。産まれた時から一緒。それがどれだけ酷なものか……考える と色々思い出される光景。それが走馬灯のように流れるに違いない。

「橘さん？」

いろんな事を考えていた時、暁から言葉を発した。

「あの……友達になってももらえないかな？あ、うつんって欲しい！」

そんな言葉が暁の口から漏れ出した。

「え？」

一瞬聞き間違えたんだろうか？暁からそんな言葉が口から出るなんて思ってもいなかった。でも直ぐに応えた。

「勿論だよ！そんな風に言って貰えるなんてうれしい！大歓迎！」

キララが鞆から顔を出す。本気で喜んでいる茜を見てニコニコと笑っていた。

神が取り組んだこの『パトナ計画』はこうやって今でも根付いている。その判断は間違っているのかどうかは現時点ではまだ試作品であって、完全な物ではない。でも、ごく自然に育っている人間は依存することを放棄しなくてはならない。

まだまだ、完成を待つ必要性、有り。

でも、人間は強い生き物である。それは間違いない。

FIN

#7 さようなら（後書き）

このようなものを書いてたら、神の存在を肯定してしまう自分に吃驚デス。でも、居てくれたらイイナァでも、人間のしてる事にちやんと目を見張ってくれてる神様が良い。

じゃないと、この世界自身が物語みたいに感じるから。と言う事で、パトナ計画はこれにて終了です。

おつきあいありがとうございました。

次回は。。。何をUPしようかちよつと考えてみます。では、またお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3571d/>

パトナ計画

2010年10月8日15時45分発行